

公表用論文要約

トリラトナダーサの般若經典理解

木村整民

本論文は、トリラトナダーサ (Triratnadāsa, ca. 5–7c5) 『仏母般若波羅蜜多円集要義
釈論』(**Prajñāpāramitāpiṇḍārthasaṃgraha[kārikā]vivaraṇa*, 以下、『円集要義釈』) を考察
対象とし、それに先行する瑜伽行唯識派関連の経論を踏まえながら、トリラトナダーサ
が、『八千頌般若波羅蜜多』(*Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, 以下、『八千頌』) の綱要書で
あるディグナーガ (Dignāga, ca. 470–530) 『仏母般若波羅蜜多円集要義論』
(*Prajñāpāramitāpiṇḍārthasaṃgraha*, 以下、『円集要義』) を通して、般若経をどのように
理解したかを明らかにしたものである。

本論文は、トリラトナダーサの思想的意義を解明するために、トリラトナダーサが注
釈の対象とする『円集要義』の著作目的や構成と内容、そして、教説の中核となる十六
空 (*ṣoḍaśākāra śūnyatā*, 十六種のものごとには何ら固定的で永遠不滅の性質などが存在
しないとする概念) と十種散乱 (*daśa cittavikṣepa*, 十種の心の乱れ)、および三性説
(*trisvabhāva*, 三つの性質の説) について考察した。各章の内容は以下の通りである。

【第1章】 著者トリラトナダーサと、著書『円集要義釈』を考察対象として、それら
に関する情報の整理をした。『円集要義釈』を通じて『円集要義』の著作目的、構成と
内容を概観し、トリラトナダーサが、「無二知」(*advaya jñāna*, 二つの〔部分が〕存在し
ない認識) を注釈の基盤にしていることを明らかにした。

トリラトナダーサの伝記には、彼が、ディグナーガと同朋である点や、両者が互いに
注釈書を作成した事実が記されている。一方で、トリラトナダーサが、ヴァスバンドゥ
(*Vasubandhu*, ca.320–380/ca. 350–430) に師事したという記述に問題がある点や、『円集
要義釈』においてダルマキールティ (*Dharmakīrti*, ca. 600–660) 以降の推論式を使ってい
る可能性がある点など、トリラトナダーサとディグナーガを同朋とするのに疑わしい点
もある。このように、両者の関係には、肯定的要素と否定的要素が混在するため、両者
が同朋であったという伝記の記述を全面的に認めることは難しいと考えた。そこで、本
論文では、ディグナーガと同朋説と、ディグナーガの後輩説両方の可能性を解消出来る
トリラトナダーサの二人説も示唆した。

『円集要義』の著作目的は、人々が、『八千頌』を正しく理解することで、知恵の究
竟に到ること、つまり、知恵を完成させること (*prajñāpāramitā*) である。『円集要義』
第一偈は、知恵の完成の一義的な意味を、無二知、如来 (*tathāgataḥ*)、完成されるべき
もの (*sādhya*) とする。これに対して、トリラトナダーサは、「無二知」のみを取り上げ、
第一義であると宣言する。トリラトナダーサによる無二知の定義は、所取 (*grāhya*, 認

識対象)と能取(*grāhaka*, 認識主体)などの二を離れた認識、あるいは、教えを聞くこと、それを思惟すること、そして、実践することの仏道修行によって獲得される迷いを離れた清浄な認識(清浄知)である。このように、知恵の完成を、所取と能取を離れた清浄な無二知に置き換えて、無二知を軸に般若経を捉えるところに、トリラトナダーサによる注釈の基本姿勢が見える。

『円集要義』は、第二偈において、『八千頌』の構成と内容を、「拠り所」(*āśraya*)、「説示対象」(*adhikāra*)、「行為」(*karman*)、「実践」(*bhāvanā*)、「分類」(*prabheda*)、「指標」(*liṅga*)、「罪過」(*āpat*)、「功德」(*anuśaṃsa*)の八項目にまとめる。この内、「実践」と「分類」を、十種散乱の対治と十六空に細分類し、計三十二項目とする。このように、『円集要義』の内容は、十種散乱の対治と十六空が中心である。また、この八項目に対するトリラトナダーサの解説内容は、プトゥン、ツォンカパに踏襲されていることから、後世のチベットにおいて『円集要義』を解釈する際は、トリラトナダーサの解釈を介して理解した可能性が高い。

【第2章】 十六空について、般若経に始まる空性分類の系統からたどり、その経典の一系統から派生した瑜伽行唯識派の十六空の流れを整理した。瑜伽行唯識派の十六空では、トリラトナダーサの十六空理解の基となる『中辺分別論』(*Madhyāntavibhāgabhāṣya*)、『円集要義』を順に取り上げ、最後にトリラトナダーサの理解を明らかにした。

般若経が説く空性は、サンスクリット原文・チベット語訳『二万五千頌般若波羅蜜多』(*Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*, 以下、『二万五千頌』)などの計二十空を説く系統と、漢訳『二万五千頌』(『放光般若経』などの総称)やチベット語訳『一万八千頌般若波羅蜜多』(*Aṣṭādaśasāhasrikā Prajñāpāramitā*)などの計二十二空を説く系統に大きく分かれる。

中観派による注釈書は、二十空の系統に属する『入中論』(*Madhyamakāvatāra-kārikā*)、『現観光明莊嚴論』(*Abhisamayālaṃkāra-lokā Prajñāpāramitāvyākhyā*)であり、経典に忠実に二十空を解説する。

一方で、二十二空の系統に属し、二十二空を上から十八個抜き出し、十八空として注釈したものに、『大智度論』と『二卷本訳語釈』(*sGra sbyor bam po gñis pa*)がある。このことから、中観派の二十空と同様、十八という分類法が、学派問わず一つの流れになっていった可能性は高い。また、中観派同様、内容は基本的に経典に準じている。

これらに対して、瑜伽行唯識派の十六空は、二十空の系統に属するものである。しかし、空性の名称は、おおよそ一致するものの、その内容は経典のものと一致しないものが多く、『中辺分別論』を軸に独自の展開を見せる。

『円集要義』は、十六空の名称を一々列挙しないが、おおむね『中辺分別論』に依拠して内容を解説する。ただし、空性の順番と、無性空(*abhāva-sūnyatā*)と無性自性空(*abhāvasvabhāva-ś.*)の内容の二点が異なる。まず、空性の順番が異なる理由は、独自

の体系で十六空を解説する『中辺分別論』と違って、『円集要義』の場合は、『八千頌』が説く順に十六空を説く」と明言しているためと考えられる。『円集要義』が引用する経文は、『八千頌』と内容、順番ともに一致する。しかし、これらの一致は、『円集要義』が経典を引用して解説する空性に限って言えるものであり、十六空全体が、現存の『八千頌』の構成順序に沿って列挙されているとまでは、確証できない。

次に、無性空と無性自性空の内容について、『中辺分別論』は、この二空を十六空の基盤とする。また、無性空は、空性の否定的な意味（人・法の無）、無性自性空は、肯定的な意味（人・法の無の有）を持つものとして規定する。これに対して、『円集要義』は、この無性空、無性自性空を、それぞれ人空と法空の意味で解説し、空性の肯定的側面を説かない。この二空に対する相違は、『円集要義』が『八千頌』に沿った理解を示すために生じた可能性もありうる。また、『円集要義』の十六空は、対象の否定や分別の否定を徹底するものであり、「無の有」を意味する無性自性空は、十六空の解説では特に必要なかったと考えられる。

一方、トリラトナダーサは、『中辺分別論』の十六空に関する偈を引用し、『中辺分別論』ヴァスバンドゥ釈の十六空の名称を各空性に当てはめる。さらに、ヴァスバンドゥ釈の解釈に基づいて自身の注釈を補い、『円集要義』の十六空を『中辺分別論』と結びつけようとする。ここで問題となるのが、無性自性空の解釈である。トリラトナダーサは、法空に対して無性自性空の名称を当てる。しかし、その内容は、『中辺分別論』ではなく、『円集要義』の理解に沿って解説する。このように、『中辺分別論』と『円集要義』との相違点に気づきつつも、それらを統合して解説するのは、『円集要義』の解説を逸脱しない範囲で、『中辺分別論』を最大限に活用した結果であろう。

【第3章】 十種散乱について、先行する瑜伽行唯識派関連の経論に遡って内容を整理し、これら瑜伽行唯識論書の教えを継承する『円集要義』の理解と、トリラトナダーサの解釈を考察した。

十種散乱は、初め、『大乘莊嚴經論』(*Mahāyānasūtrālaṃkāra*)において、分別(vikalpa, 概念的認識)と呼ばれ、アサンガの『摂大乘論』に至って、それらが散乱分別(vikṣepavikalpa, 心の乱れなる概念的認識)と呼ばれるようになる。『摂大乘論』は、各散乱を般若経の経文に対応させて、その内容を説く。また、「あらゆる般若経が、無分別知を十種散乱の対治(十種散乱を排除するもの)として説く」と述べ、十種散乱と無分別知を対立関係に置く。さらに、『摂大乘論』ヴァスバンドゥ釈は、散乱が知恵の完成なる無分別知の達成を妨げるものと解釈し、また一方では、三性説を用いながら散乱の内容を説く。このように、十種散乱とその否定が、般若経から抽出された教えであることが、『摂大乘論』によって明らかとなる。

『円集要義』は、その影響下で、『摂大乘論』が引用する般若経と同じ内容のものを編集し受容する。『円集要義』は、ヴァスバンドゥ釈と同様に、「散乱した心が無二知の

達成に相応しくない」と述べる。そして、無二知と十種散乱を対立関係に置く。また、散乱の説明に三性説を導入するのも、ヴァスバンドゥ積と共通する点である。

十種散乱の中で、特に注目されるのは、第一～第四の無相散乱 (*abhāvanimitavikṣepa*, ものは無という特徴を持つとする心の乱れ)、有相散乱 (*bhāvanimita-v.*, ものは有という特徴を持つとする心の乱れ)、増益散乱 (*samāropa-v.*, 無なるものを有とする心の乱れ)、損減散乱 (*apavāda-v.*, 有なるものを無とする心の乱れ) に関連付けて説く三性説と、第五と第六の一性散乱 (本質を同一とする散乱) と異性散乱 (本質が異なるとする散乱) である。前者については、次章で扱う。後者の文脈では、無二知である仏が、無知なる凡夫と対立関係にあることを説いた上で、無二知が対立する二つの散乱を排除すると明言する。

これに対して、トリラトナダーサは、『摂大乘論』、『円集要義』の流れに沿って、無二知が十種散乱の主題であることを強く意識し、十種散乱の否定を順に解説していくなかで、一貫して「無二知の存在」だけは否定しない。また、一性散乱と異性散乱の二つが、十種散乱すべてを集約すると述べる。この二つの散乱に集約する理由にも、無二知が関係する。一性散乱は、所取と能取の二が同一であると分別することであり、異性散乱は、それらの二が別々であると分別することである。

トリラトナダーサは、無二知が散乱を排除することを、推論式などによって、詳細に証明する。推論式で論証される内容は、無二知が外界対象を持たない「自己認識であること」と、「無二知が実在すること」である。まず、「無二知が自己認識である」ことを論証し、無二知が所取と能取の二という異なる性質を持たないことを示し、異性散乱を否定する。「無二知が実在する」ことの論証では、非実在を拒斥する実在と、無知を拒斥する無二知は、「実在する」という同一性を持つことを証明する。つまり、実在するものが無二知である。このように、「無二知の実在」が、推論によって確定すると同時に、無二知が、無知すなわち散乱を排除することを証明する。

以上のように、トリラトナダーサは、十種散乱において、「無二知の実在」に力点を置いている。さらに、無二知が散乱を排除するという『摂大乘論』に由来する『円集要義』の言明について、十種すべてを一性散乱と異性散乱の二つに集約する。そこで、推論式などを駆使して、自己認識たる無二知の実在を確定しながら、その二つの散乱を無知に置き換えることによって、無二知が散乱を排除するものであることを証明している。十種散乱の解説において、ディグナーガ晩年の自己認識論と、推論式を用いて論証する点は特記すべきトリラトナダーサによる十種散乱解釈の思想的発展である。

【第4章】 先行する瑜伽行唯識派関連の経論が説く三性説をもとに、般若経との関係にも注意しながら、『円集要義』の三性説を整理し、トリラトナダーサが、最終的に『円集要義』の三性説をどのように理解したかについて検討した。

まず、『阿毘達磨大乘経』(*Abhidharma-mahāyānasūtra*) が、三性説の遍計所執性

(parikalpita-svabhāva, 全くの思い込みで執着されている性質)を非存在、依他起性(parikalpita-s., 他の何かに依存して生じる性質)を幻術等、円成実性(pariniṣpanna-s., 完全に成就した真実の性質)を四種清浄(caturdhā-vyavadāna, 四つの清らかさ)であると説き、その説を『摂大乘論』等が受け継ぐ。そして、『大乘莊嚴經論』や『中辺分別論』は、認識論的、存在論的、瑜伽行的な側面から、三性説を分析する。また、これらの三性説は、依他起性を軸として展開する。さらに、三性説は、増益と損減を対治するものとして用いられる。

『円集要義』は、最初に三性説と般若経との関係に言及し、般若経が、三性説に依拠して説かれたものであると断言する。『円集要義』が述べる三性説の内容は、上述の『阿毘達磨大乘經』や『摂大乘論』の記述と同じである。次に、『円集要義』は、三性説を、十種散乱のうち、有相散乱(増益散乱とほぼ同義)の解説の後と、損減散乱の解説の後との二箇所に挿入する。『円集要義』が、この二散乱の後に三性説を挿入するのは、先行論書と同様に、増益と損減の二散乱の対治として三性説を用いていることを意味する。まず、有相散乱の解説では、対象が「存在しない」という経文によって、対象が有とする有相散乱を排除するために、遍計所執性を否定する。続いて、損減散乱の解説の後では、幻術の譬喩によって、仏が実在しないとする損減散乱を排除するために、仏の存在(円成実性)と、幻術の存在(依他起性)の二つを肯定する。また、「仏」の語は、凡夫に備わる本来的に清浄な「無二知」を意味し、その清浄で無二知たる仏は、無明(無知)たる幻術によって覆われ凡夫には見えないだけであると述べる。

このように、増益散乱(有相散乱)の場合には、遍計所執性の非存在を強調し、損減散乱の場合には、依他起性あるいは円成実性の存在を強調する。『円集要義』が想定する三性説については、明確な定義がなされないために断定はできないが、幻術の譬喩の説き方をもとに整理すると、『大乘莊嚴經論』や『中辺分別論』などの先行論書が説く三性説の内容と矛盾せず、実質的に同じ三性説を説いているものと考えられる。

次に、トリラトナダーサは、『円集要義』が示した般若経が三性説に依拠して説かれている点、三性説が増益と損減の対治として説かれている点については、忠実に注釈する。また、トリラトナダーサの理解は、認識論的な側面から、依他起性を基軸とする従来の瑜伽行唯識論書の理解と異ならない。ただし、トリラトナダーサは、円成実性を「無二知」とし、その無二知に力点を置いて三性説を解説するという特徴がある。この特徴から、飛田氏は、トリラトナダーサの三性説理解に対して、従来の瑜伽行唯識論書のように依他起性を基軸とする三性説と区別し、円成実性を基軸とする三性説であるとする。この指摘が、トリラトナダーサが無二知たる円成実性に力点を置いて三性説を説いているという意味ではなく、三性説の構造に対して「円成実性を基軸とする」とするのであるならば、再考する必要があると思われる。したがって、本論文では、トリラトナダーサの三性説理解は、従来の瑜伽行唯識派論書と同様に、依他起性を基軸とするものであるかを検討し、同様であることを明らかにした。

【まとめ】 以上、本論文では、『円集要義』が般若経の説示として中心に据えた十六空と十種散乱、および三性説に関するトリラトナダーサの解釈を明らかにした。トリラトナダーサの般若経理解を簡潔にまとめれば、『円集要義』が、瑜伽行唯識派の先行論書に忠実であることを証明しながら、自身の主張する「無二知」に力点を置き、注釈している点に特徴が見られる。また、無二知を自己認識とし、ディグナーガ晩年の思想である自己認識論までも経典解釈に取り入れた点はトリラトナダーサの大きな功績であろう。知恵の完成の第一義の中でも「無二知」を特別視したことは、トリラトナダーサ独自の解釈である。このように、徹底して「無二知」を中心としたトリラトナダーサの注釈の姿勢は、『円集要義』ひいては、般若経の主題が「無二知」であることを示していると言える。

本論文は、研究史において、初めてトリラトナダーサの思想を総合的に考察したものである。しかしながら、以下のように、トリラトナダーサの研究について未解決の点は多い。まず、先行する瑜伽行唯識派の諸論書の各注釈書とトリラトナダーサの関係である。今回は、十種散乱において、主に『撰大乘論』ヴァスバンドゥ釈のみ扱ったが、十種散乱を扱う『大乘莊嚴經論』の諸注釈などとの影響関係についても検討する必要がある。次に、ディグナーガによるトリラトナダーサに対する注釈書が現存するため、それを検討することによって、両者の思想的な関係を改めて精査する必要がある。これらの課題を含め、瑜伽行唯識派の経典理解を総合的に解明するために、引き続き研究を進めたい。